

発言要旨 松本市農業の課題解決プラットフォーム 第2回コア会議

※本文中に頻出する用語について

「テーマ①」…新しい農業の発信地・松本の売込み

「テーマ②」…個性を生かした中山間地の再生・活用

【横山氏】（梶原氏より提供いただいた資料をみて）家畜の放牧について、誰がどのようにやり、資金繰りはどのように行うのか。日々の飼養管理や家畜伝染病リスクなど生きものを扱うのは大変だが、放牧の考え方はどのようなものか。

【梶原氏】粗放的管理の中での放牧は中山間地の活用方法の一つである。一頭からスタートしてもよく、荒廃地や獣害の解消に繋がるものである。

【横山氏】養蜂を大きく実施している友人がおり、北海道から沖縄までトレーラーで運び、山を買い取り、レンゲやクローバーを育てて養蜂をしている。蜂は個体数を毎年50%ずつ増やすことができ、餌やり等の日々の管理が少ないので割と簡単に始めやすく、荒廃地対策として使えるのではないか。レンゲやクローバー畑は風景としてもよいので、観光資源になり得るし、ハチミツも人気で売りやすい。そういう意味で、牛の放牧も観光資源として利用できる可能性がある。

【宮原氏】余談だが、蜂もある種動物なので、広い意味で養蜂は放牧といわれることがある。

【柳澤氏】中山間地で荒れている土地を解消して、色々な木や花を植えて蜂を放つということか。

【横山氏】低コストでできるいい方法だと思う。

【横山氏】事務局が用意した2つのテーマの他に、共通して核となるテーマを置く必要があるのではないか。それは「農業人口の増加」だと思っている。農業人口の増加を目指すうえで、耕作する農地がないと困るので荒廃地を解消するといった考え方でどうか。

【柳澤氏】テーマ①「新しい農業の発信地・松本の売込み」については大規模な平坦地での農業、テーマ②「個性を生かした中山間地の再生・活用」については小規模な中山間地の農業を考えるものであるという認識である。これを踏まえて、担い手の減少を前提に個人農業から脱皮して地域農業を実現していくべき

ではないか。一例として、地域で組合を設立し、移住者等を組合で雇用、地域の農家に派遣していくようなものが考えられる。これは法的に実現可能なもので、移住者等は組合職員として収入もあり、独立していく機会もある。地域農業の中でITスマート化を進め、人材育成も行う。農産物のロスも地域農業の組織として加工販売もできるがいかがか。

【宮原氏】地域のいくつかの農家が集団化する事例は宮田方式や飯島方式など県内にもあるが、農家の所得向上にはつながっていない。共助の精神でやっているが、生産額の向上につながっておらず、市場に出す農産物をどのように作るのかが所得向上のキモとなる。農業の価値をどこに置くのか、共助組織の中でどのように利益を分配していくのか考えなければいけない。

【柳澤氏】個人の収入に繋がっていないのは現状としてあるが、コアテーマに「”食べていける、持続できる”儲かる農業」というのがある。海外に比較して、農家の出荷金額が上がらない。欧米は農家の収入は国の補助である。それは環境等の維持に国民の理解があるからであり、そこが日本と違う部分で難しいところである。

【宮原氏】おっしゃるとおりで、日本でやろうとすると価格が暴落するが、海外はそこを国が補填している。農家が価格を決められない経済体系が課題である。どのように生産コストを価格に転換していくかはマーケティングとして考えるべきことである。

【梶原氏】先ほどの値段の話だが、松本市は学校給食に減農薬を取り入れるという動きがある。四賀で実現できたのは自校給食であるからで、松本全域でやろうとすると相当に頑張る必要がある。しかし、有機栽培というだけで価値があり、学校給食が採用という価値も生まれる。また、中山間地で育てた蜂や牛でもよく、今の時代に合致している生産物なので、それだけストーリーになるし今までと違う販路が確保できるのではないか。

【柳澤氏】12月に農業委員会で京野菜を視察に行った。そこではブランド化する団体が組織的にできている。中山間地で栽培する伝統的で美味しい野菜であるが、松本にも伝統野菜があるのできちんとブランド化して、美味しく作っていくのが大切である。学校給食で使用することで認知を広めるのはよいことで、地域の中でお金も循環していく。ブランド化して地域の中でまわすことができれば、大規模化しなくてもやっていけるのではないか。

【高野部長】四賀の学校給食の話もあったが、今日の会議では農業人口の増加や地

域農業でやるという話があった。私も学校給食と一緒に食べさせていただいたが、有機野菜をどのくらいの規模で提供するのか、学校給食の観点でいくと中山間地に限った話ではない。学校給食という収益化の出口があるので、そこにかかる費用をステークホルダーの人に議論していただくことを、コア会議で話していけるとよいのではないか。

【梶原氏】コア会議で話し、取り組んでいければブランディングにもよい。

【高野部長】県にもコーディネーターがいるので、一つの仕組み作りはできるのではないか。

【横山氏】今井で有機栽培をやろうとすると、生産性が低くてやらないと思う。病気のリスクも高い。中山間地の10アール以内の農地でやるにはいいかもしれないが、それに見合うリターンが少ない。コストとリターンが大規模化に向かない。経済的に儲かるなら大規模でもやろうという方向になるが、現状は難しい。

【高野部長】今の話はそのとおりだと思う。学校給食では出せる規模が決まっているのでテーマとしての学校給食はあるが、事務局が用意したテーマ①は儲かる農業や農業人口の確保、②は地産地消といったこととして取り組めないかと思う。

【梶原氏】京野菜との比較で、松本の伝統野菜が広まっていない理由があると思う。例えば、生産性の低さや規格外が発生するといった理由。伝統野菜を推進していくのであれば、そのマイナス部分を補填してもらえないとできないのではないか。

【三宅先生】伝統野菜だからこそ外に広げるのではなく、外から来た人に対してアプローチしていくべきではないか。

【横山氏】長芋やスイカもそうだが、種は地域で囲っている。産地ごとに特徴があり、それをオープンにする必要性はない。なので、総合供給産地として松本に来ればなんでも美味しいものが食べられるぞというスタンスでもよいと思う。ただ、やはり誰が作るのかが課題となり、作る人がいなければ行政もブランド化に取組みづらいのではないか。

【宮原氏】伝統野菜の生産を担っている人口は高齢者が多いと思うが、後継者はいるのか。

【柳澤氏】後継者は少ないのが現状である。

【横山氏】有機も伝統野菜もマーケットが小さく儲かりづらいので、やる人は少ないのではないか。

【梶原氏】例えば千葉県では農地が広く、有機農業を大規模にやっている人もいるので、松本平全体でできるのではないか。中山間地で有機農業をやるのも一つの手だが、皆さんがおっしゃるように生産量を安定させて施設に販売するとなると、大規模にする必要がある。松本平は広く平らな場所があるので実現可能ではないか。

【横山氏】有機農法が偏った考え方であると思っている人もいる。我々が普通に生活していて、農薬を多少使っても長生きしている人がいる中で、美味しい野菜を作るために農薬を使うという考え方もある。

【柳澤氏】その食い違いをここで一緒に議論しようとは思わない。補足を含めて様々な意見が出たので、後半は絞り込んだ2つのテーマについて、検討部会の設置に向けて話を進めていきたい。

————— 休 憩 —————

【柳澤氏】これまでの話の流れでは大枠テーマ①と②はそれぞれ別の議論をする必要があり、同じテーブルではできないものであると同意していただけたと思う。テーマ①は人材をどのように確保していくかが核となるもの、テーマ②は学校給食というキーワードが出たが、ある程度の方針はコア会議でまとめるが、具体的に何に着手するかは検討部会で議論する形にできないか、皆さんの意見を聞きたい。

【梶原氏】テーマ③として学校給食を立ち上げるということか。

【柳澤氏】新しいテーマを起こすのではない。テーマ②を実現するために具体的に何をするのか。学校給食という小テーマの中に、中山間地の活用の具体的な取り組み等が入ってくると思う。

【高野部長】イメージだが、今回はテーマ①②が示されているが、それを実現しようというわけではないと思っている。大きな方向性としてこの2つのテーマがあるが、具体的にはどこを議論するのか、色々な小テーマがある。学校給食や

有機や減農薬を小テーマとしてどうかと言ったのは、先日の学校給食の取組みの中でステークホルダーがある程度固まったからである。まずはそういうところから議論を始めて、次の議論へ発展させていくように進めるのがいいのではないか。まずは1つ課題解決をやってみるということだと思う。

【横山氏】私の解釈を話すと、まずは中山間地の畑が荒廃していくことが大問題であり、何とかしないといけないというところからスタートしていると思っている。それをきれいにして、野菜や放牧で育った農畜産物の出口として学校給食という選択もあり、地域の特産品としての販売の選択もある。学校給食をどうするかであれば、ここではなく教育委員会やPTAでやればよい。農業をどうするかというテーマで始まっているので、中山間地の荒廃地対策として放牧や野菜栽培等があり、出口の一つとしての学校給食や特産品PRとしての選択肢があるという考え方である。

【梶原氏】なぜ私がそう言ったかということ、ステークホルダーが固まってきているならそれで会議ができると思ったからである。

【柳澤氏】学校給食は中山間地農業の有力な出口の1つである。作ったものがきちんと売れていかないといけないので、安定した出口になり得る。さらには、生産する食材のバリューチェーンまで考えていく必要がある。

【横山氏】なので、まずは荒廃地をどうするか、どのような人にやってもらうか。そこが固まらないといけない。

【梶原氏】了解した。

【柳澤氏】①の方向性としては人材の確保が核となるということによろしいか。

【横山氏】よいアイデアがあってもやる人がいなければ絵に描いた餅なので、人材確保は大きなテーマであるし、優先度が高い。それに農業の観光化やDX利用を紐づけていくことが必要である。それらが絡みあうことで、農業人口の維持・増加に繋がり、やりたい人から選ばれる産地になることを目指していきたい。それが意味のブランド化であると思う。なので、農業人口の増加や農業の活力向上を目標に、その手段として荒廃地の活用という位置づけではないか。

【柳澤氏】人材確保にかかる人材の育成はどのような場でやっていくか。

【横山氏】学校と一緒に、まずは正しい指導者を育てることが必要である。農業には里子里親の関係があるが、安い雇用者と思われるパターンがある。師弟関係で師匠が言うことに反論せずやるだけという環境では乖離が生まれ、人が育たなくなってしまう。師匠は弟子を育てるという意識が必要である。なので、正しい指導者を育て、その後に教え子を預かるという流れを作ることが重要である。

【柳澤氏】横山氏の取組みの中で今井に指導者がいるのか。また、それは地域としてやっているのか。

【横山氏】指導者は何人かいる。これは地域としてやっている認識はなく、私のグループの取組みの中でやっている。経過を話すと、私が楽しそうにやっており、その姿を後輩たちがみて、後輩たちもやってみようと思える雰囲気作りを心掛けた。例えば飲み会を開いたり、作業を皆で取り組むようなことで、成功事例を重ねて人が集まってきた。その中で色々な考え方を学び、それが次の世代に繋がっていくような流れである。師弟関係は、弟子になったことがない人は案外指導できない。優秀な農家だからいい師匠になれるというわけでなく、そのような継承スタイルが今井地区のエネルギーになると思ってやり始めたものである。まずはそのような指導者を作る人材育成が必要ではないか。

【柳澤氏】要するに、私が途中で言いかけた地域農業という形態の中で次の農業を担う世代を育てるということか。しかし、若い世代もただ働きはしないので、組織の中で一定の収入を得ながら分担した仕事をこなしていく。それで地域の農業を盛り上げていくということを私も考えていた。

【横山氏】なのでお金は大切である。無償でやるのは頑張って1～2年である。賃金をしっかり支払うことで、同じ方向へ進むことができる。

【事務局】協議項目3「検討部会の設置に向けた調整」で形を具体化させるための方向性を示しているが、検討部会を立ち上げて議論するためには、こういった組織が検討の母体となるのか。今までの議論を聞いていると、テーマ①②という方向性には皆さんのコンセンサスを得ることができたと思っている。①②は一緒にする必要はなく、それぞれで動いていくものだと思っている。①は様々な課題があるが、どの組織が具体的に解決に向けて動いていくのか、その組織はどの程度自走できるものなのか。組織の具体像について議論していただきたい。②についても、全部をやるのか、細かいところをかいつまんでやっていくのか。そういうところも議論していただかないと進まないのではないかと。最も重要なのは3の(4)「検討部会の運営」のところである。

【梶原氏】それを①②で決めていくということか。

【柳澤氏】同じテーブルで議論できないので、①②で別々の動きになると思う。

【横山氏】3の(4)のア「主体となる運営者の具体像」はこのコア会議ではいけないのか。

【柳澤氏】検討部会は今の話だと少なくとも2つは必要である。

【横山氏】私どもで言うと、テーマ①で農未来のプロジェクトとリンクできればと思っている。しかし、農業のDXという1つの部会も必要であると考えている。

【柳澤氏】農未来からテーマに興味のある人材を出していただき、その人たちを中心にステークホルダーを集めて、検討部会でさらに深い議論をしてもらうことでどうか。

【横山氏】人材育成の課題はどうするのか。

【柳澤氏】人材育成を議論するうえで、どのような人が必要なのか具体化したうえで、例えば大学から必要な人材を供給してもらうことや、場合によっては行政から供給してもらうことを考えればよいのではないか。まったく新しく立ち上げるのではなく、成功事例を1つ作り、それを足掛かりに話を進めていくのがよいのではないか。

【横山氏】農未来を母体にやることは考えていない。テーマ①を検討する別の母体があり、そこに農未来の人材を供給してプロジェクトとテーマをリンクさせることは考えている。なので事務局の示した大枠テーマに複数の分科会がぶら下がっており、その下に複数の作業部会がぶら下がっているというイメージをしていたが、あっているか。

【事務局】プラットフォームの体系図で示したとおり、具体的に検討するテーマが決まれば課題別検討部会で協議して実行するイメージで位置付けている。どのような母体が検討部会を担うのか議論していただきたい。

【横山氏】例えばテーマが4つあれば4つの部会を作ればよいと思うが違うか。そこに専門的な者を配置して、同時進行して解決に向けていければよいのではないか。

【柳澤氏】 検討部会というのが1つあり、その中に課題ごとに分科会がぶら下がっている。要はアウトプットとして、松本農業が盛んになり人が育つというのがアウトプットなので。

【高野部長】 課題別検討部会は、①と②で議論いただいて、それぞれで課題検討部会を設けるイメージである。しかし、運営する組織がないので、そこはステークホルダーが集まってもらい、皆で議論し、そこを誰がまわすかと言えば事務局がまわすではないのか。その中で、いくつかの論点がある場合はどうするかと言えば、ここでは決めきれないのではないのか。

【柳澤氏】 あるいはいくつかの論点が出てきたときに、それぞれ優先順位をつけるのはどうか。今取り組むべきはこれとこれ、残りは課題として認識しつつ後回しにしておけるという形でいけるのではないのか。出てきた課題についてすべて分科会を作って走り出すというよりは、その中で優先順位をつけるのがよいと思う。

【高野部長】 まずは2つだと思う。今回の大枠テーマ①②で。

【梶原氏】 課題別検討部会＝大枠テーマ①と②ということか。

【高野部長】 テーマ①②の中でどの部分をやるかはここで決めるものだと思う。

【三宅氏】 テーマ①②でそれぞれ検討部会を作ることについて、逆に議論を細かいところまで落としていくのは、それぞれの検討部会の役割だと思っていたが違うか。それぞれ焦点が違うことを扱うテーマなので、まずはそれぞれ課題別検討部会を作って、その中に横山氏の言っていたような分科会を作るのがスマートだと思うがどうか。

【高野部長】 テーマ①と②で手法が違うと思ったが、テーマ②はここでいう地産地消だとぼやけるので、先ほど言った学校給食のステークホルダーがある程度固まったので、まず個別テーマの1つで課題別検討部会をやってみたほうが良いのではないかと思った。それをテーマ②全体でステークホルダーを集めるとなると、様々な個別テーマの全部の関係者を集めることになる。

【宮原氏】 まだ順番をつけてもいいと思う。例えばテーマ②で課題別検討部会を作って、その中で取り組む課題に優先順位をつけて、その順番にステークホルダ

一を集めるというのを、来年度早々にやればよいというイメージではないか。

【事務局】協議項目2で参考として示した「②協議の進め方（一例）」のとおりかどうか。

【柳澤氏】これで進んでいけそうではないか。

【事務局】だとすれば、2つ課題別検討部会を立ち上げて、課題別検討部会の中で何を優先的にやっていくか小テーマに順位をつけて実施するという手法になると思う。

【柳澤氏】宮原氏が言ったのはそのようなイメージだと思う。

【事務局】横山氏の意見と合致するののかということもあるし、テーマ①②それぞれ誰が担うのかという議論にもなる。その「誰が」を核に利害関係者に集まってもらうことになる。

【梶原氏】そうすると、テーマ②は小テーマとなり得る課題が多すぎて、検討部会ですら誰に招集をかけるのか決めかねる。

【事務局】小テーマに応じて利害関係者は常に入れ替わっていく可能性もある。

【横山氏】結局は誰がやるのかは、部門別に分かれてそれを誰が選定して誰が招集するのかということか。

【梶原氏】タイムラインとしてはどうするのか。2月以降に開催する検討部会で議論する個別テーマをどれにするか決めるのか、それともコア会議で決めてしまって、検討部会ではそれを話し合うのか。

【事務局】それが協議項目2「着手する課題と検討部会の設置方針」で議論していただきたい部分である。

【高野部長】検討部会を2つ設けるということでいいのではないか。

【柳澤氏】検討部会を立ち上げるにしても、今日のような議論が蒸し返されてはいけない。先に進めるような形にしておかないといけない。コア会議ではテーマ①②の大枠があるが、これはこれとして念頭に置きながら、テーマ①②の検討部会では、コア会議でこの小テーマで進めてほしいということであれば、それ

に従って検討部会の人を集められるのではないかと。忘れてはいけないのは、地産地消の仕組み作りを考えていくと、野菜だけではなく、肉もあるという話が出てくるかもしれない。すると肉はここでいう放牧のテーマで出てきているから、それについて取り組めるのはどんなことだろうか、という話で進めていくのではないかと。

【三宅氏】どのレベルを課題別検討部会にするのか。第1回会議のまとめ（資料）で例示された個別テーマではまだまだ高いレベルにあると思う。そのあたりを今考えないと、協議項目2の議論も難しいのではないかと。学校給食というテーマに絞っても野菜、肉というテーマが出てきて、それぞれに課題が出てくるといったのが想像できる。

【柳澤氏】その中でも野菜から取り組んでいくという優先順位を決めていくのではないかと。一度に全部しようとするとうりきれないと思う。

【三宅氏】松本市としてもここまで進んでいるということを見せるという点では、先ほどの給食を先行して走らせて、並行してもう少しコア会議でテーマを絞っていくのがいいかと思った。

【横山氏】それでいうと、テーマ①は観光もDXもすべてがリンクしている。1つ1つ片付けていっても、行き詰ったときにそっちに対策が流れていく。それだけ大きなテーマである。だから、テーマ①で①-1 荒廃地対策と①-2 DXと①-3 観光の3つの柱を設けて、さらに分科して、知識を持っている人を集めて議論するという意味で、自分の中ではこの3つは必要である。1つ片付けたら次をやるでは、行政の慣例では20年がかりである。

【事務局】そうすると横山氏の考え方は、テーマ①が課題別検討部会で、①-1、①-2、①-3が小テーマという位置づけでいいのではないかと。では、テーマ①をどこが運営するかという話で具体化できると思う。

【宮原氏】議論を折って申し訳ないが、コア会議における我々の役割として「課題の選定」が与えられているが、今日のコア会議はテーマ①について、次のコア会議はテーマ②について小テーマを決めていくというのも、今のメンバーであればありな気もする。

【横山氏】そこはコア会議でよいと思う。随時会議を設けて、検討部会の議論が正しい方向か、もっと上からの目線で、第三者的な機関として置くということ。また何が重要かという、松本市長名で通知が来ることもある。どんな企業と

話しをするにも、市長名で活動の説明をするステータスがほしい。

【横山氏】それでテーマ②は「荒廃地をどうするか」という基本テーマでやるのがよいと思っている。

【事務局】今の議論を聞いていると横山氏がおっしゃっているのは、①-1から①-3までそれぞれ1つずつ、計3つの課題別検討部会があって、例えば①-1に中山間地も含めて学校給食もできるというイメージか。

【横山氏】例えば、中山間地をきれいにして、施設を建てるならDXの生かし方等がリンクしてくる。我々が今井でやっている大所帯のスタイルと中山間地でやるスタイルは明らかに違うし、交えて話すことが正しいのかは疑問に思ったところである。各スタイルでリンクさせながら議論していくことがいいのかなと思った。

【梶原氏】テーマ①と②は分けておいて、コア会議は随時開催されるので検討部会にフィードバックしながら、小テーマをリンクさせるイメージか。

【柳澤氏】話し合いの中でテーマごとに重複してくる部分もあると思うが、基本的には松本の平坦地と中山間地の取組みは異なっていると思うし、地形や気候に合致した取組みでいいと思う。それぞれの部会がスタートしてテーマが大きすぎるようなら、コア会議でまた検討するということも考える。

【事務局】横山氏が懸念されている市長名の話であるが、コア会議でなくて課題別検討部会に市は関係をもっていき、必要があれば検討部会の招集の事務的な部分も担える。

【横山氏】必要であればではなく、やってもらわないと困る。

【事務局】現場の方に主体性をもってやってもらいたいが、事務局が汗をかく部分もあると思っている。

【横山氏】最初は自転車をこぐときに支えてもらって、動いてきたら手を放すというのはわかるが、最初から自分たちは支える側であるのでそちらで何とかしましょうと言われると、何をすればいいのか困ってしまう。

【柳澤氏】松本市としての取組みで、人を集める時には市長名でというのでいいのではないか。

【横山氏】 行政の皆様にも前向きになってもらわないと、私たちなんの力もないので。

【高野部長】 後ろ向きではなくて、どうやって回していくのがベストか未知数だったのでそのような発言になってしまった。基本的にはやる。

【横山氏】 今後の流れとしては、コア会議の我々3名と事務局が連携をとって、①-1のテーマについて、仮に私が中心になるとすれば、私と事務局のやり取りを起点に始めていくということではないか。例えば、テーマ②では梶原氏と事務局がやり取りをする等。そのようなイメージを作って、行政に招集してもらい、これに対する補助金等の情報を提供してもらおうというような、形であってほしい。

【事務局】 そうすると協議項目3の(4)「検討部会の運営」を整理させていただくと、主体となる運営者の具体像は、1つの柱は横山氏、もう1つは梶原氏になっていただき、事務局とキャッチボールをさせていただきながら、次の一手はどうするか決めていく。この課題について検討するという話になれば、扱う課題に応じて招集するメンバーは異なり、お二人を核に展開するというところでよいか。

【柳澤氏】 今回の会議ではそのような流れになってきた。

【梶原氏】 大枠のテーマ①が横山、②が梶原を中心としてやっていくということか。

【事務局】 そうということである。何に着手してどういう人を集めるのか、様々なやり方を含めて相談したい。

【事務局】 協議項目3の(1)「検討部会へ協力を求める利害関係者の選定」、(2)「課題解決の中心となる事業者の設定」、(3)「専門アドバイザーの選定」について方向性は決まったが、着手する課題をどれにするかということまでは難しいと思う。

【柳澤氏】 テーマ②はまずは1つの目標として学校給食でいいのではないか。学校給食を地産地消で賄っていく、そのためになにが必要なのか検討していくのではないか。

【事務局】 階段を1段登るという意味で、学校給食から梶原氏の部会をやってみる方向で整理させていただきたい。横山氏のテーマ①の方は3つを同時並行でやっていくということか。

【柳澤氏】バックにあるのは人材育成なので、そこにどのように育てていくかという話であると思う。人材育成を図りながら荒廃地、観光、DXの3つの課題にどのように取り組んでいくかというものだと思う。

【横山氏】人材育成は外してほしい。時とともに教えていけばいい。コアになるのは荒廃地、観光、DXだと思っているので、この3つの部会を同時に立ち上げたい。なので、最初はどのようなメンバーを選定していくことから始まると思う。

【梶原氏】横山氏にはテーマ①については、協議項目3の(1)~(3)のイメージはあるということか。

【事務局】個別に協議して1~2月中に決められればよい。

【横山氏】農未来にはかなりの人材がいる中で、農業以外の分野の専門家もいるが、多様な人を入れて議論していきたい。配置したい人はいるが、これだけでいいかと言われれば足りていないと思っている。

【高野部長】荒廃地と観光とDXは同時並行でやらないといけないのか、そうではないのか。農業人口の増加にもっていくために、3つのテーマが絡み合うから3つ一緒にとということか。

【横山氏】そういうことである。何をやるにもDXや観光が絡んでくるので。

【柳澤氏】絡んでくるのはわかるが、観光化というのは後からついてくるのではないか。まずは荒廃地対策というのは農業のDX化が進んでいかないと、観光化を仕掛けるのは難しいのではないか。

【横山氏】観光という視点から考える人がDXや荒廃地をきれいにしている人にアプローチをすることもある。こういう観光資源があるから、これに沿ったことを考えられないかということ。例えば、これが大きくDXの方向性と違っていれば、その方向性に沿った方がいいという展開になるのではないか。それぞれが勝手にやっていて一緒になることは難しく、同時並行で最初からリンクを想定して、整合性を合わせていくのがよいのではないかと思っている。

【高野部長】人は皆違っていてもいいのか。

【横山氏】違っててもよいし、かぶっている人がいてもよい。

【高野部長】まずは個別に3つの部会があって、その後に1つのテーマに向かって話し合うというイメージか。

【事務局】あくまでテーマを3つ並行でやっていき、3つ並行で完結する場合もある。しかし、それぞれのテーマでやったときに、荒廃地対策で議論が進んだときにDXが必要だという話がでた場合には、荒廃地対策からDXの分科会に対して相談しに行く。そこで初めてリンクが生まれるので、必ずしも荒廃地対策とDXが同じゴールを共有するわけではない。それは個別の分科会に応じた議論の進め方でリンクの度合いが生まれてくるのではないか。

【横山氏】要は役所の産業振興部にぶら下がっている農政課、耕地課、商工課で同時に仕事が進んでいるようなイメージである。

【高野部長】テーマとしては今のテーマ①であれば荒廃地、観光、DXの3つ、②は学校給食関係ということでよいか。

【一同】よい。

【宮原氏】スケジュール管理は誰がやるのか。松本市としても年度末に課題別検討部会を立ち上げたいのは完結しそうだが、来年度はコア会議をどのくらいの頻度で開くのか。誰がどのように管理するのか確認しておきたい。

【事務局】予算的なことで恐縮だが、コア会議は年3回開催予定である。

【柳澤氏】コア会議では課題別部会の報告をしてもらうということか。それとは別に課題別検討部会は月1～2回なのか。

【高野部長】そこは今日ここでお示しするのは難しい。コア会議は年3回と言ったが、必要があれば予算はとればよい。どの頻度でどうやってやるかはこちらでもう一度検討して、お話をしていく中で適切な頻度があれば、それを考えていくというものではないか。

【宮原氏】例えば、コア会議のタイミングである程度のアウトプットが必要であれば、コア会議に合わせて検討を進めて、プレイヤーも選定していく動きが必要になる。また改めてお知らせいただきたい。

【横山氏】自分としてはテーマが大きいので、月1くらいは検討部会を動かしていきたい。それにはおおざっぱなスケジュールを決める会議を年明けに開催して

ほしい。

【柳澤氏】 課題別検討部会でこういう人に集まっていただき、こういう人が必要だという要望も含めて、1月中にやっておいた方がよい。

【横山氏】 横山と梶原でそれぞれこのような人材がほしいという青写真を描いて、シミュレーションしながらそれに向けて次の会議で提示して、事前に具体名が出る人は出せばよいし、事前に事務局をお願いして探していただくこともあるかと思う。

【柳澤氏】 それぞれの部会に必要な人が決まれば、2～3月中に検討部会がスタートできることになるのではないか。そういうタイムスケジュールでよいか。

【事務局】 今後の予定として示したとおりなので、そうできればと思う。

【柳澤氏】 1月中に開催準備ということか。横山氏と梶原氏と事務局で詰めてから、その情報を共有するのがよいと思う。

【事務局】 そうすると、またコア会議を開催することも含めて調整させていただくということによいか。個別に調整がとれるところはとり、最終結果を認識していただくために集まっていただくことも含めて。

【高野部長】 ある程度やって、ここにもっとこういう人材が必要ではないかということや、次の会議で意識共有して、部会にもっていくという流れでお願いしたい。

【柳澤氏】 部会メンバーの承認は最終的にどこがやるのか。

【事務局】 何かを委嘱するわけではないので、コア会議で決めればよいのでは。

【柳澤氏】 初めての試みなので行ったり来たりがあるかと思うが、なるべく前に進めるように努力する。

【三宅氏】 部会に関してはボランティアとして参加することになるのか。

【事務局】 そうである。自発的な形を考えている。

【横山氏】 人によっては有料であることも考えて、ボランティアはそれだけの働きしかしないので、お金払ってでも優秀な人間が必要なら、その財源確保も必要

ではないか。

【事務局】アドバイザーという位置づけでそれも考えている。

【三宅氏】アドバイザーは意見を聞くために呼ぶということだが、話している方も自分事とするために、交通費や時間の拘束分を出したほうが議論が進むと思う。

【高野部長】予算的な問題もあるので、どうするかは検討させていただきたい。今おっしゃった交通費であればなんとかなるかもしれないが、日当は調整したい。

【横山氏】本格的になれば自ずと出てくる課題なので考えておいた方がよい。会社等でその事業体にメリットがある場合は来てくれる場合もあると思うが、そうでない場合は難しいのではないかな。

【三宅氏】また、何年先を目標にするかで呼ぶ人も変わってくるのではないかな。短期的にやらないといけないのか、10年先に達成できればよいのかで、中身も変わってくるのではないかな。どのくらいを目処に考えているのか、共有していただいた方がよい。

【高野部長】目標的などころというより、課題解決のためのプラットフォームとして、そこまで遠い先ではなく、ある程度農に関する課題をどうするか議論なので、そういう意味からするとそれほど長いスパンでは考えていない。

【横山氏】私のイメージでは5年である。農業者の平均年齢が70代なので、10年後には80代になってしまう。10年後はハードランニングする仮定を立てて、ソフトランニングする人を生き残らせるには5年が妥当ではないかと思っている。

【柳澤氏】本当は10年先まで考えたいが、今就農している人の希望を叶えたい。工業と違って短期間では結果を出せないなので、少なくとも5年くらいは見ておきたい。

【横山氏】枠組みは短期間でも作れるが、結果が伴ってくるかは5年10年かかる。

【柳澤氏】それでは年明けにコア会議がある心づもりで、今日の会議は閉会としたい。そこで今日の議論は人材や組織を含めて見えるようにして、検討部会の進め方を確認するというので、次回は進めたいと思う。